

もろ　　おか  
諸岡B遺跡3

——諸岡B遺跡第23次調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1060集



ph.1 1号壺棺墓挿入状況(北より)

2009

福岡市教育委員会



# 序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、博多区諸岡4丁目で実施した特別緑地保全地区広場の整備工事に先立つて実施した諸岡B遺跡第23次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、甕棺墓と土壙墓からなる弥生時代の共同墓地が発見されました。この共同墓地は、諸岡丘陵の頂部に位置し、昭和49(1974)年に調査された第3次調査区の甕棺墓群と同じ墓域を構成しています。丘陵の裾野に分布する一群の甕棺墓群と併せて諸岡丘陵を共同墓地として選んだ古代の人々の営みとその消長を解明する上で興味深い発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になると共に、学術研究に活用していただければ幸いです。なお、発掘調査から整理報告までの間には、地元や福岡市都市整備局公園緑地部緑化推進課をはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## .....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が諸岡特別緑地保全地区広場の整備工事に先立つて、平成19(2007)年度に、福岡市博多区諸岡4丁目地内で緊急発掘調査した諸岡B遺跡第23次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、小林義彦が作成した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は、小林が行った。
6. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0744	遺跡番号：MRB-23	分布地図番号：024-0093
調査地籍：福岡市博多区諸岡4丁目地内		
工事面積：1,000 m <sup>2</sup>	調査対象面積：50 m <sup>2</sup>	調査実施面積：145 m <sup>2</sup>
調査期間：2007年10月15日～10月22日		

# 本文目次

序

I.	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織	1
3.	立地と歴史的環境	3
II.	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	I区の調査	6
1)	妻柏墓	7
2)	土壙墓	15
3)	土 壙	16
3.	II区の調査	16
1)	土 壙	17
4.	おわりに	17

# 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図(1 / 25,000)	2
Fig. 2	諸岡B遺跡位置図(1 / 5,000)	3
Fig. 3	諸岡B遺跡周辺旧地形図(1 / 20,000)	4
Fig. 4	諸岡B遺跡周辺現況図(1 / 2,000)	5
Fig. 5	諸岡B遺跡第23次調査区位置図(1 / 400)	6
Fig. 6	諸岡B遺跡第3～5・23次調査区位置図(1 / 400)	折り込み
Fig. 7	I区遺構配置図(1 / 50)	7
Fig. 8	1号妻柏墓実測図(1 / 30)	9
Fig. 9	1号妻柏実測図(1 / 12)	9
Fig. 10	2・3号妻柏墓実測図(1 / 30)	9
Fig. 11	2・3号妻柏実測図(1 / 12)	11
Fig. 12	5・6号妻柏墓実測図(1 / 30)	11
Fig. 13	5・6号妻柏実測図(1 / 12)	13
Fig. 14	9号妻柏墓実測図(1 / 30)	13
Fig. 15	9号妻柏実測図(1 / 6)	14
Fig. 16	4号木棺墓実測図(1 / 30)	14
Fig. 17	7号土壙墓実測図(1 / 30)	15
Fig. 18	II区遺構配置図(1 / 50)	15

# 写真目次

ph. 1	1号妻柏墓挿入状況(北より)	表紙
ph. 2	I区全景(北より)	8
ph. 3	1～3号妻柏墓全景(北より)	8
ph. 4	1号妻柏墓全景(東より)	10
ph. 5	2号妻柏墓全景(東より)	10
ph. 6	3号妻柏墓全景(西より)	10
ph. 7	1・5・6号妻柏墓全景(南より)	12
ph. 8	3・5号妻柏墓全景(西より)	12
ph. 9	6号妻柏墓全景(南より)	12
ph. 10	9号妻柏墓全景(東より)	13
ph. 11	4号木棺墓全景(西より)	14
ph. 12	4号木棺墓裏込め横断面(北より)	14
ph. 13	7号土壙墓全景(南より)	15
ph. 14	II区全景(西より)	16
ph. 15	出土妻柏(縮尺不同)	16
ph. 16	I区妻柏墓全景(東より CG合成)	裏表紙

Tab. 1	諸岡B遺跡妻柏墓・土壙墓一覧表	8
--------	-----------------	---

## I. はじめに

### 1. 発掘調査にいたるまで

諸岡B遺跡は、福岡平野南部の福岡市博多区諸岡に位置し、昭和30年代まで農業を基盤とする村落が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、高度経済成長期の昭和40年代以降、郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

この諸岡B遺跡は、御笠川と那珂川によって形成された沖積平野の中に屹立する独立丘陵上に立地している。この諸岡丘陵の南西には、奴国王墓の地である春日市の須玖岡本遺跡があり、そこから北には井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵が長く延び、その低丘陵上には弥生時代から古墳時代の集落城や那珂八幡古墳などの墳墓群が延々と続いている。この丘陵上からは、北に博多湾が、南には東西に延びる水城堤を経て筑後平野へと続く平野の狭隘部が遠望され、福岡平野をパノラマ的に一望することができる。

諸岡B遺跡第23次調査区は、この諸岡丘陵の頂部にある。ここには瀧見天神社や諸岡八幡宮が鎮座している。それ故に近在では唯一自然の縁が残る所で、春には桜が咲き誇り地域の人々に親しまれている。しかし、この縁豊かな丘陵も北の諸岡八幡宮を除く三方は、市街化による開発で切り立つ崖のように削られて旧状は見る影もない。かつてこの丘頂には忠魂社が建立されていたが今はなく、周囲には防護柵が巡らされていたが、長年の劣化で損傷が著しくなっていた。このような状況下で都市整備局公園緑地部では、緑地保全の一環として公園の再整備と防護柵の改修を計画された。

埋蔵文化財第1課では、平成19(2007)年8月30日に周囲の約100mについて試掘調査を実施した。その結果、南や北側の防護柵際で甕棺墓や土壙を検出し、防護柵と側溝工事によって破壊される箇所について緊急に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成19年10月15日からはじめ、10月22日に無事終了した。短期間の調査とは云え、条件的にはきわめて劣悪で発掘中は蔽蚊の襲撃に悪戦苦闘であった。しかしながら、甕棺墓群や木棺墓の発見は、丘頂部における墓域の拡がりを窺い知ることが出来るものであった。

発掘調査にあたっては、公園緑地部総務課の担当者や町内会長をはじめとする地元の方々のご協力と発掘作業に従事した方々の労苦に改めて感謝します。

### 2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園緑地部緑化推進課

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財部埋蔵文化財第1課

文化 財 部 長 矢野三津夫

埋蔵文化財第1課長 山口譲治

埋蔵文化財第1課調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課 榎本芳治(課長) 古賀とも子(現任) 鈴木由喜(担当)

調査担当 埋蔵文化財第1課 小林義彦

調査・整理作業

石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 大瀬良清子 坂梨美紀 土斐崎孝子 馬場イツ子  
濱フミコ 松尾千寿 松下さゆり 三栗野明美 矢川みどり



Fig.1 周辺遺跡分布図(1 / 25,000)

### 3. 立地と歴史的環境 (Fig.1・2)

諸岡B遺跡のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。諸岡B遺跡は、この福岡平野の東部にあり、東は三郡山系より派生した四王寺山塊と月隈丘陵に、西は背振山系より派生した油山山塊によって囲繞遮断され、平野の中央部には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込んでいる。この二つの河川によって博多湾に面した下流域には広大な三角州が形成されている。

諸岡B遺跡のある両河川の中流域には、阿蘇山の噴火によるAso-4火碎流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する標高11～15mの低平な河岸段丘が北の博多湾にむかって断続的に長くのびている。奴国王の王墓地と推定される岡本遺跡のある春日市の須玖岡本から井尻、五十川から那珂、比恵へと連なる春日丘陵はその主脈の一つである。一方で低地には、早良花崗岩風化礫層を基盤層とする台地が点々としている。諸岡丘陵もその一つで、南北が100m、東西が150m、標高が23mの独立丘陵である。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に重なって展開している。ことに、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

この諸岡丘陵から俯瞰する沖積地一帯には、板付遺跡や那珂遺跡、比恵遺跡、須玖岡本遺跡などの著名な遺跡が集中し、奴国を中心的地域を形成している。旧石器時代は稀薄であるが、板付遺跡や三筑遺跡、井相田遺跡、麦野A～C遺跡、那珂遺跡などで細石刃やナイフ

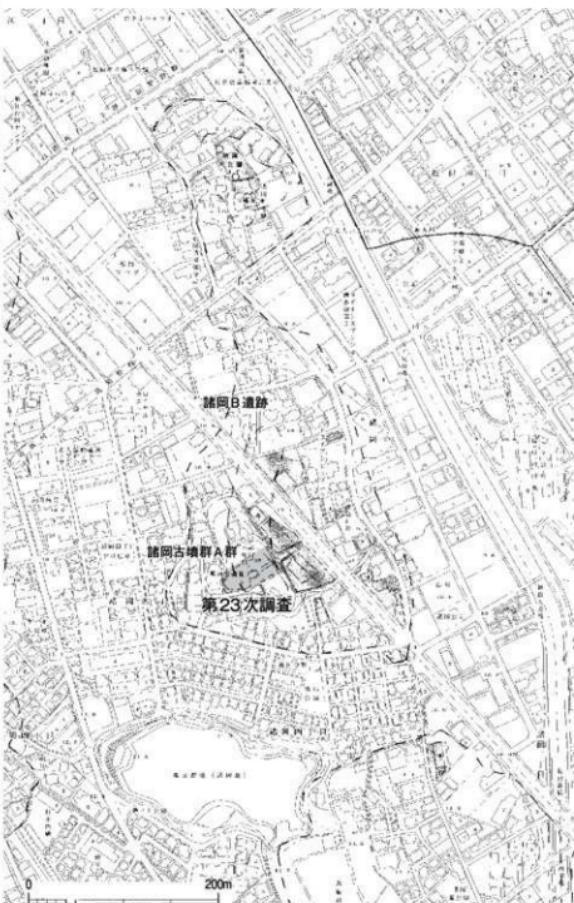


Fig. 2 諸岡B遺跡位置図(1/5,000)

フ型石器、石核が発見されている。縄文時代の遺跡も少なく、板付遺跡や諸岡B遺跡で押型文土器の出土が報告されている。

弥生時代になると遺跡は急激に増加する。諸岡B遺跡の北東には、農耕開始期の遺跡として著名な板付遺跡がある。丘陵上には環壕を二重に巡らせた集落が営まれる。壕外の沖積地には可耕地の水田が拡がり、集落の近くには壺棺墓をはじめとする墓地が數カ所に営まれて農耕開始期における集落構成の在り方を探ることが出来る。このうち南北の丘陵に挟まれた板付田端遺跡では墳丘墓が形成され、細型銅劍と銅矛が壺棺墓に副葬されていた。また、南西には須玖岡本遺跡があり、壺棺墓内には30余面の前漢鏡のほか銅劍や銅矛、玻璃璧などを副葬されていた。この須玖岡本遺跡の前面には青銅器やガラス工房跡の水田遺跡や五反田遺跡などがある。この須玖岡本遺跡から北へ延びた丘陵上には井尻遺跡や那珂遺跡、比志遺跡などがあり、ここからも銅弋や銅鎌などの鋳型や坩堝などが発見されており、丘陵上に展開する奴国を形成する有力な拠点的集落域で青銅器などが鋳造されていた。

次の古墳時代にもこの様相は継続し、丘陵上には集落域とともに那珂八幡古墳や剣塚古墳、井尻B1号墳などの前方後円墳や前方後方墳のほかに小円墳が造営されている。古代には、井尻B遺跡や那珂遺跡で百濟系の単弁瓦をはじめとする丸瓦や平瓦のほかに「寺」とヘラ描きされた須恵器皿が出土しており、寺院跡や官衙の存在が指摘されている。

諸岡丘陵を中心とする諸岡B遺跡は、貝原益軒の「筑前国統風土記」に建武新政期の合戦場跡として記されていたが、遺跡として周知されるのは太平洋戦争の勃発した昭和16(1941)年である。丘陵の西側に高射砲陣地が構築されたときに多数の壺棺墓が出土した。また、昭和28年には戦没者を祀る忠魂社の建立時に細型銅劍や貝輪を副葬した発見されている。しかし、本格的な考古学的調査は、地下式横穴をはじめとする中世の遺構が確認された昭和47年の第1次調査に始まり、今日まで23ヵ所で発掘調査が実施されて各期の遺構が発見されている。

諸岡丘陵では、5地点で発掘調査が実施されている。丘陵の東南部で実施された昭和48年の第2次調査では、ナイ

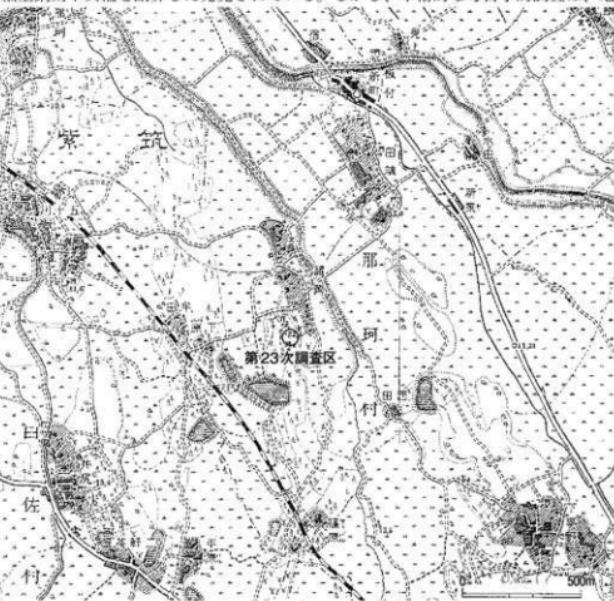


Fig. 3 諸岡B遺跡周辺旧地形図(1 / 20,000)

フ型石器やスクレイパー、石核などナイフ型石器文化期の包含層が確認されたほか3基の土壙墓と51基の甕棺墓が検出され、43号甕棺墓からはゴホウラ製貝輪が出土した。翌昭和49(1974)年の第3次調査は、丘陵頂部(瀧見天神社)西側の擁壁工事中に発見された甕棺墓群で9基の甕棺墓が検出された。このうち2号甕棺墓には横臥屈葬した成人男性の右前腕に8個のゴホウラ製貝輪が装着されていた。また同年には丘陵の東側緩斜面上で第4次調査(東南斜面)と第5次調査(東北斜面)が

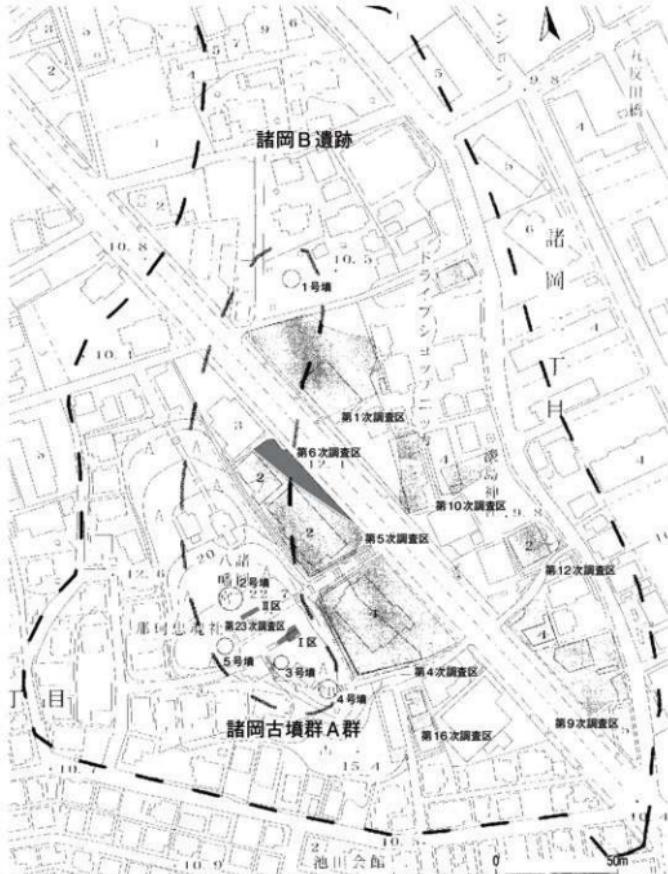


Fig. 4 諸岡B遺跡周辺現況図(1/2,000)

実施され、弥生時代前期や古墳時代の土壙のほか中世の地下式横穴6基が発見されている。このうち第4次調査区で調査された弥生時代前期の土壙からは朝鮮半島の無紋土器が出土している。また、この丘陵上には尾根筋に沿って5基の小円墳が造営されている。

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

この諸岡B遺跡は、御笠川の左岸中流域に形成された沖積平野の中に屹立する独立丘陵上に立地し

ている。この諸岡丘陵は、東西長が150m、南北長が100mの小高い独立丘陵で、瀧見天神社裏の諸岡A古墳群3号墳の墳頂高は23.5mである。第23次調査区は、この2号墳と3号墳に挟まれた一画に位置する。ここは本来3号墳から北の2号墳にかけて緩やかに傾斜していたものと考えられるが、忠魂社や家屋の建設によって造成され、3号墳の北裾や西裾(第3次調査)は削り取られて基盤層が露出している。第23次調査は防護柵と側溝によって破壊される2カ所について実施し、南側の調査区をI区(L・Mトレンチ)、北側の調査区をII区(G・Hトレンチ)と呼称して実施した。その結果、I区では中央部で木棺墓を、東端で完存する甕棺墓を検出した。また、この甕棺墓の北にも甕棺墓の一部が露呈していたために調査範囲を北へ2mほど拡げて調査を実施した。この調査区の拡張によって更に3基の甕棺墓が検出され、墓域が北西方へ拡がっていることが予測された。また、このような甕棺墓の検出状況から甕棺墓の存在が予測された東側(Kトレンチ)についても墓域の拡がりの把握に努めた。結果的に丘陵は東へむかって急速に、北側は2号墳の南東裾へむかって緩傾斜して続くことが予測され、試掘調査時に出土した甕棺片は忠魂社建立時の破碎甕の可能性を考えられる。

一方II区では、1基の小土壙とビットを検出したが古墳に係わる遺構等は検出されなかった。

## 2. I区の調査

試掘調査で甕棺墓等を検出したL・Mトレンチをひとつの調査区としてI区とした。調査区は、埋設する側溝に沿って幅が1.4m、長さが11mのトレンチ状に設定した。調査区の西半部は丘陵が大きく削平されて遺構は全く検出されなかった。しかし、これとは対照的に中央部で土壙墓を、更に東端で甕棺墓を検出し、一部がその北側に拡がっているのが判った。そこで調査区を北側へ3mほど拡張

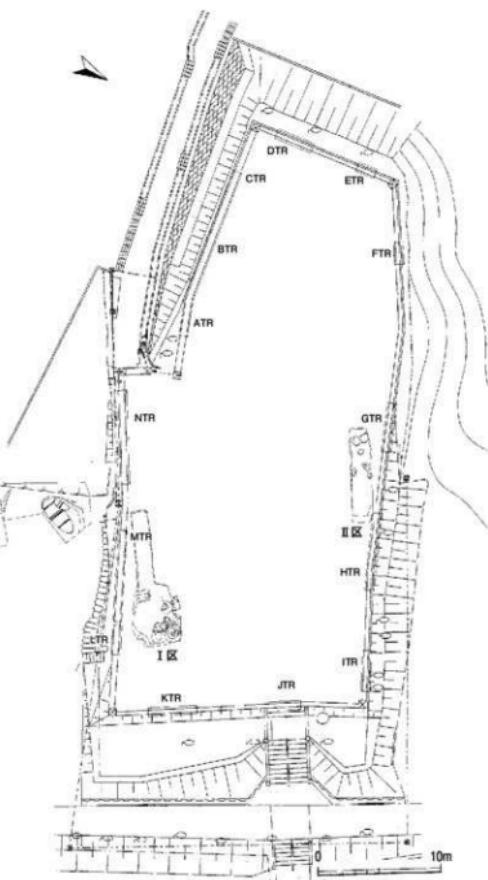


Fig. 5 諸岡B遺跡第23次調査区位置図(1/400)

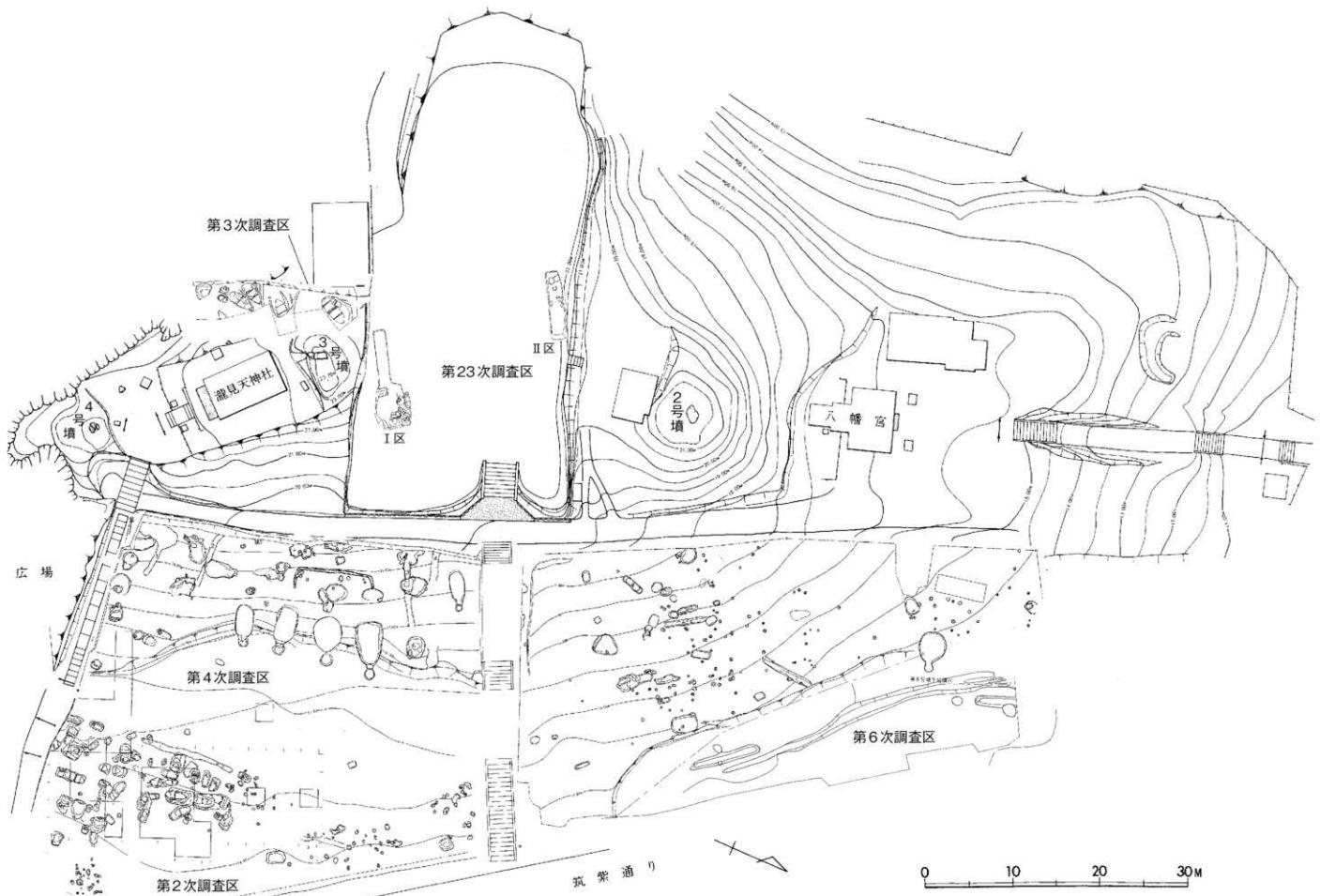


Fig. 6 諸岡B遺跡第3～5・23次調査区位置図(1／400)

して甕棺墓群域の確認を図った。又、試掘時に遺構の確認された東南縁に位置するGトレーニーの一部を再掘して旧地形の復原を図った。

### 1). 甕棺墓 (ST)

甕棺墓は、合わせて6基を検出した。分布的には、調査区の東側に偏して拡がるが、北端にある6号甕棺墓の北側にも拡がっている可能性がある。一方、南接する丘陵上の諸岡A3号墳の西にあるB区(1974)では9基の甕棺墓が調査されており、甕棺墓は古墳を中心とする丘陵上に拡がっていたものと考えられる。

#### 1号甕棺墓 ST-01 (Fig.8-9 ph.3・4・15)

1号甕棺墓は、I区の東側にまとまって分布する甕棺墓中で最も東端に位置する呑口式の成人墓で、挿入口の北壁は5号甕棺墓の墓壙を切っている。また、下甕の墓壙上には3号甕棺墓が埋置されている。墓壙は、はじめに直径が150cmほどの不整な円形の竖穴を60～80cmほど掘り込み、更にその1次墓壙の西壁側に沿って直径が80cmほどの斜坑を約30°の傾斜で110cm掘り込んで2次墓壙としている。甕棺は、この斜坑の中に大型の甕を挿入し、その後に中型の甕を下甕の口縁部内に挿入したいわゆる呑口式のもので、上甕と下甕の接合部には灰白色粘土を厚めに巻いて密封している。また下甕は、胸部凸帯下から底部は墓壙底に貼り付けるようにして埋置しているが、胸部上半は墓壙底との間に5～10cmの隙間があり、そこには明黄橙色粘土がブロック状に混入した暗褐色土を充填して安定を保っている。一方、甕棺と墓壙の天井の間には土砂を充填することなく、中空な状態をなしている。主軸方位はN-67°-Eにとる。下甕内から骨片がわずかに検出された。

上甕(1)は、口径が47.4cm、底径が11.2cm、器高が66cmの甕形土器である。口縁部は内唇がわずかに跳ね上がる「く」字状の口縁で、頸部下には1条のシャープな三角凸帯が巡っている。胸部は膨らみの小さな倒卵形をなし、底部

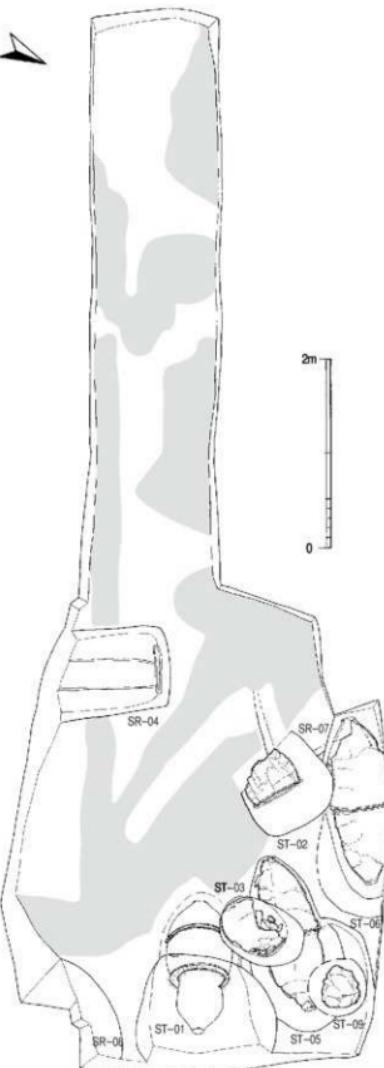


Fig. 7 I区遺構配置図(1 / 50)

はわずかに上げ底状をなしている。調整は、口縁部～凸帯下がヨコナデ、外面はタテヘナメの粗いハケ目。内面は、粗い研磨状のナデで底部は強い指頭押圧ナデ。外面は口縁部から胸部上半にかけて煤様の黒色顔料が付着している。また、内面にも筋状の付着痕が数ミリ単位の幅で遺存しており、その付着痕は甕棺の挿入角に対して水平方向をなしている。胎土は良質で、微細砂粒と石英小砂を多く含み、焼成は堅緻。外面はくすんだ暗赤橙色、内面は淡橙褐色。

下甕(2)は、口径が59～60cm、底径が12cm、器高が96.4cmの大型の甕形土器である。口縁部は、シャープな逆「L」字状をなし、内唇を小さく内方に摘み出している。胸部は砲弾形をなし、口縁部下に1条、最大径部に2条の「コ」字凸帯が巡っている。調整は、口縁部と胸部凸帯部がヨコナデのほかは押圧ナデ調整。底部は指頭押圧ナデ。外面全体と内面の上半部には煤様の黒色顔料痕があり、全体に塗布されていたことが想

起される。胎土は良質で、微細～石英・長石の小砂粒とシャモット様の赤褐色粒を多く含む。焼成は堅緻。外面が黄橙色～赤橙色、内面は淡黄橙色。外面には黒斑がある。

#### 2号甕棺墓 ST-02 (Fig.10-11 ph.5-15)

2号甕棺墓は、I区の東側にまとまって分布する甕棺墓中で最も南西にある単口式成人墓で、胸部下半は埋設管による搅乱で消失している。甕棺墓の底部側は7号土壙墓を、挿入口側の墓壙壁は6号甕棺墓の墓壙を切って掘り込んでいる。削平が著しいが、墓壙ははじめに竪穴を掘り、その南側に1段低く掘り下げた2次墓壙を掘ったものと思われる。一方、埋置する甕棺の口縁部にあたる壙底には



ph. 2 I区全景(北より)



ph. 3 I ~ 3号甕棺墓全景(北より)

造構 No	合口形態	甕形態	墓 壙			主軸方位	埋置傾斜	備 考
			長辺(cm)	短辺(cm)	深(cm)			
ST-01	成人	呑口式	甕+甕	200	80～200	110	N-67°-E	32° 2段掘り 粘土目貼り
ST-02	中人	木蓋單口式	甕	120	95	25+α	N-36°-E	ほぼ水平 木蓋 粘土目貼り
ST-03	成人	木蓋單口式	甕	100	65	45+α	N-21°-W	37°
ST-05	成人	接口式	甕+甕	240	75～135	60+α	N-56.5°-W	0° 2段掘り 粘土目貼り
ST-06	成人	接口式	甕+甕	215+α	80～115	50+α	N-60°-E	6° 2段掘り 粘土目貼り
ST-09	小児	単口式?	丹波甕	—	—	25+α	N-62°-W	40°
SR-04	木棺墓			150～170	95	35+α	N-21.5°-W	2段掘り
SR-07	土壙墓			110～	60～70	25+α	N-47°-E	

Tab. 1 諸岡B遺跡甕棺墓・土壙墓一覧表

甕棺の口縁部に沿って幅が5cm、深さが2～3cmほどの浅い溝状の掘り込みがある。甕棺は、この溝状の掘り込みに口縁部を揃えて埋置されている。同時に、口縁部端と溝の間には灰白色粘土が充填されていた。板材を木蓋とし、その隙間に粘土で目貼りをしたものであろう。甕棺はこの墓壙に底部をやや高くし、N-36°-Eに主軸方位をとって埋置されている。

甕棺(3)は、口径が47cm、現存高が42.4cmを測る大型の甕型土器で、胸部凸帯～底部は消失している。T字状をなす口縁部は、内唇が丸く肥厚し、外唇はシャープに端部を整え、その直下には1条の「コ」字凸帯を貼り巡らしている。胸部は、口縁部に最大径を有するスマートな砲弾形をなし、中位よりやや下には2条のシャープな三角凸帯が巡っている。胎土は良質で微細～小砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は淡明黄橙色。胸部上半には黒斑がある。

3号甕棺墓 ST-03 (Fig.10-11  
ph.6-8-15)

3号甕棺墓は、I区の東側にまとまって分布する甕棺墓中にある木蓋單口式の成人墓

で、1号甕棺墓と5号甕棺墓の墓壙上に掘り込まれている。墓壙は梢円形の竪穴を掘り、壙底より15cmほど上面で甕棺の大きさに合わせて横穴状の斜坑を掘り込んでいる。甕棺は墓壙が竪穴から斜坑へ移る変換点を口縁部の受け口としている。甕棺は、この墓壙の奥底に接するようにして37°の角度で挿入して

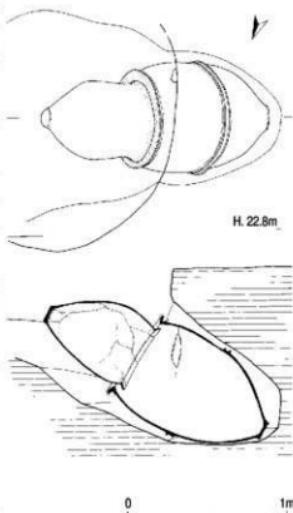


Fig. 8 1号甕棺墓実測図(1/30)

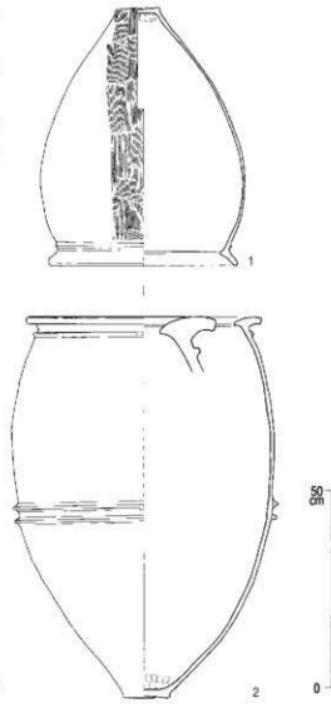


Fig. 9 1号甕棺実測図(1/12)

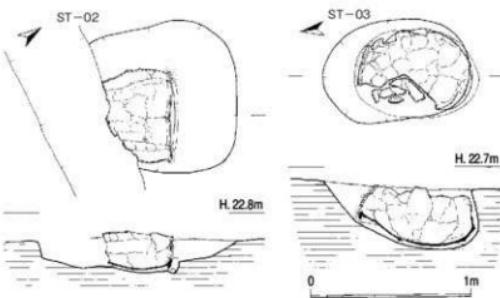


Fig. 10 2・3号甕棺墓実測図(1/30)

いる。また、墓壙に接した甕棺の口縁部には灰白色粘土があり、その層中には5cmほどの幅に黒色土が薄く堆積していた。このことから甕棺には板材を当てて覆蓋していたものと考えられる。主軸方位は、N—21°—Wにとる。

甕(4)は、口径が41cm、底径11cm、器高が66cmを測る中型の甕形土器で、器形の歪みが著しい。「L」字状の口縁部は、上縁が弯曲するような丸みをもって外反する。肥厚する外唇は丸く整え、内唇は細く尖るように摘み出している。胴部は丸みを帯びた倒卵形で、口縁部直下には三角凸帯を、胴部中位には「コ」字凸帯を各々1条貼り巡らし、このうち胴部の「コ」字凸帯は上縁を跳ね上げるように上方に摘み出している。調整は口縁部と凸帯がヨコナデ、内面は凹圧ナデ、外面は細かいタテハゲ目。口縁部下や凸帯部、胴部下半には煤様の黒色顔料の付着痕があり、外面全体に塗布されていた可能性がある。粘土紐は4~6cm幅を一単位としている。胎土には微細~石英小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は明黄~明橙色。

#### 5号甕棺墓 ST-05

(Fig.12・13 ph.7・8・15)

5号甕棺墓は、I区の東



ph. 4 1号甕棺墓全景(東より)



ph. 5 2号甕棺墓全景(東より)



ph. 6 3号甕棺墓全景(西より)

端に拡がる甕棺墓群の中で最も北東端に1号甕棺墓と主軸方向を揃えるようにして位置しており、墓壙の一端を1号甕棺墓に切られている。甕棺は、上下甕に大型甕の口縁部を接した接口式の成人墓で、墓壙上には3号甕棺墓と9号甕棺墓が埋り込まれている。墓壙は、はじめに長辺が170cm、短辺が130cmほどの梢円形プランの堅穴を掘り、その西壁に深さが25～30cmの浅い斜坑を90cmほど横方向に掘り込んだ2段掘りの構造をしている。この2段目の墓壙は、下甕の大きさに合わせるように効率的かつコンパクトに掘り、棺底は墓壙底に貼り付くようにして埋置されている。下甕と上甕の合口は上甕側がわずかに高い段構造をなして上下甕の口縁部に隙間が生じないような配慮が窺える。また、合口部には下から測線に沿って灰白色粘土を幅広く巻いて口縁部の目貼りをしている。主軸方位はN-56.5°Eにとり、埋置角はほぼ水平である。

上甕(5)は、口径が58.5cm、底径が9.8～10.5cm、器高が79.6～82.8cmの大型の甕型土器で、土圧による器形の歪みが著しい。口縁部は、内唇が強く張り出した逆「L」字状をなしている。胴部はスマートな砲弾形をなし、中位には1条の三角凸帯が巡っている。調整は口縁部と凸帶部がヨコナデ、胴部は外面がナデ、内面は強い押圧ナデで仕上げている。内外面に煤様の黒色顔料の付着が観られる。特に口縁部は、ヨコへ帯状に塗布された痕が観察される。胎土はやや粗く、細～石英小砂粒と雲母微細粒を多く含み、焼

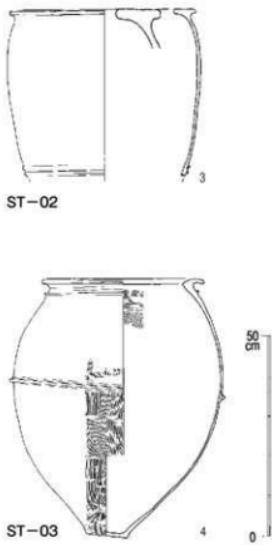


Fig.11 2・3号甕棺実測図(1/12)

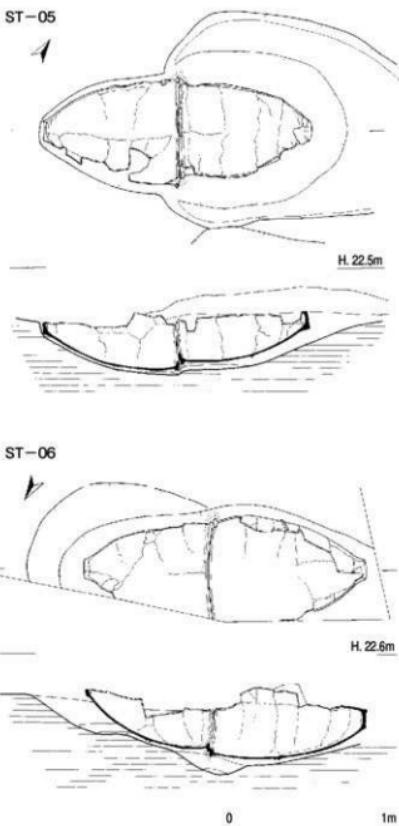


Fig.12 5・6号甕棺墓実測図(1/30)

成は堅緻。色調は淡明～暗赤褐色。

下甕(6)は、口径が67.8cm、底径が11cm、器高が84.5cmを測る大型の甕形土器である。「L」字状の口縁部は、外唇がわずかに外傾し、内唇は小さく丸みをもって摘み出している。胴部は上半が小さく膨らんだ倒卵形をなしている。胴部下半は、中位に巡る2条の三角凸帯を境として底部へむかって急速に窄まっていく。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、外面はナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で、微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含み、焼成は堅緻。色調は外面が淡黄橙褐色～淡黄色、内面は明黄橙色。

6号甕棺墓 ST-06  
(Fig.12・13 ph.7・9・15)

6号甕棺墓は、I区の東端部に拡がる甕棺墓群の中で最も北端に位置する成人墓で、南側の墓壙上には2号甕棺墓が掘り込まれている。甕棺は、上下甕に大型甕の口縁部を接し合わせた接口式で、主軸方位をN-60°-Eにとる。墓壙は、はじめに80cm×120cmほどの楕円形の竪穴を70cmほどの深さに掘り、その西壁側に幅が90cm



ph. 7 I・5・6号甕棺墓全景(南より)



ph. 8 3・5号甕棺墓全景(西より)



ph. 9 6号甕棺墓全景(南より)

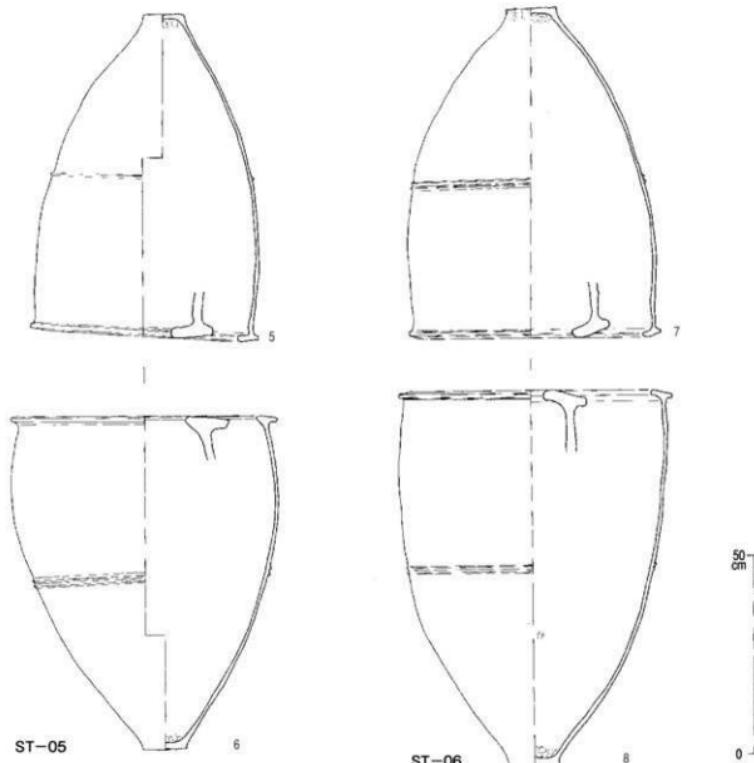


Fig.13 5・6号甕棺実測図(1／12)

ほどのスリムな斜坑を奥へ180cmほど掘り込んだいわゆる2段掘りの構造をしており、2次墓壙は25～30cmの深さまで掘り下げている。また、甕棺の接合部下は2次墓壙底より更に10cmほど溝状に掘り込んでいる。この上に褐色土を敷き、下甕を6°の傾斜で挿入し、上甕との接合部には灰白色粘土塊を置いて測線に巻き上げて粘土目貼りをしている。上下甕の棺底と墓壙底の間には2～3cmの隙間があり、ここに褐色土を敷いて棺の安置を図っているが、下甕の底部がある斜坑の奥と上縁には充填土は詰めず、空洞のままである。

上甕(7)は、口径68.5cm、底径12.7cm、器高が83.8cmの大型の甕

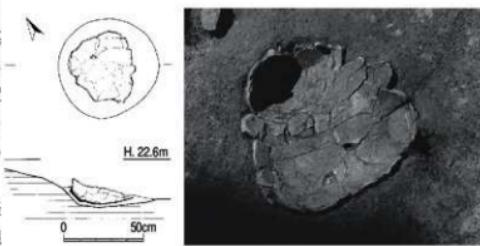


Fig.14 9号甕棺実測図(1／30)

ph.10 9号甕棺墓全景(東より)

形土器で、土圧による歪みが著しい。逆「L」字状の口縁部は外傾し、外唇は端部を小さく水平に摘み出している。一方、内唇は端部を水平に整えて丸く納めている。胸部はシャープな砲弾形を呈し、中位に2条の三角凸帯を巡らしている。口縁部と凸帶部がヨコナデ、外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。外面と内面の上半に煤様の黒色顔料が観られ、全体に塗布されていた可能性がある。胎土には微細～小砂粒のほか石英中～素粒子と雲母微細を含む。焼成は堅緻。外面はくすんだ橙褐色、内面はくすんだ灰褐色～灰黒色で一部に黒斑がある。

下甕(8)は、口径が69cm、底径が12.6cm、器高が95.5cmを測る大型の甕型土器で、全体に歪みが著しい。外傾する逆「L」字状の口縁部は、外唇を小さくシャープに摘み出し、やや肥厚した内唇は水平に丸く納めている。胸部はスマートな砲弾形をなし、中位に2条の三角凸帯を張り巡らしている。口縁部と凸帶部がヨコナデのほかは内外面ともにナデ調整。また、外面と内面の上半には煤様の黒色顔料が遺存している。胎土は良質で、多くの微細～小砂粒のほかに雲母微細を含む。焼成は堅緻。色調はくすんだ灰褐色～淡褐色。

#### 9号甕棺墓 ST-09 (Fig.14-15 ph.10)

9号甕棺墓は、I区の東部に拡がる甕棺墓群中の北東端にある小児墓で、5号甕棺墓の墓壙上面に埋置されている。甕棺には、丹塗りの壺を用いているが、胸部下半の棺底をわずかに残して大半が失われており、その全容は明らかでない。主軸方位は、N-62°Wにとり、約40°の傾斜をもって埋置されている。棺底には2×3cmの穿孔がある。墓壙は、壺より一回り大

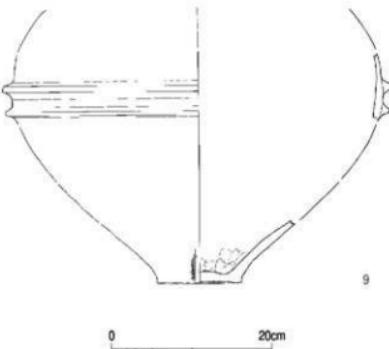


Fig.15 9号甕棺実測図(1／6)

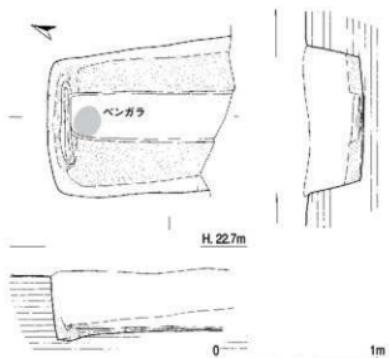


Fig.16 4号木棺墓実測図(1／30)



ph.11 4号木棺墓全景(西より)



ph.12 4号木棺墓裏込め横断面(北より)

きい梢円形プランの堅穴と推考される。

甕棺(9)は、底径が10.6cmの丹塗りの壺型土器である。玉葱状をなす胴部には2条の「コ」字凸帯が巡り、口縁部は鈎先状をなそう。胎土は精緻で、微細へ小砂粒と雲母微細を含む。色調は外面が明橙～黄橙色、内面は明橙色。

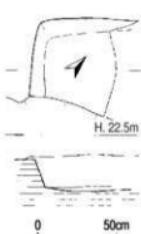


Fig.17 7号土壙墓  
実測図(1 / 50)



ph.13 7号土壙墓全景(南より)

## 2). 土壙墓 (SR)

土壙墓は、調査区の東部に偏して2基を検出した。構造的には、素掘りの土壙墓と木棺を埋置した木棺墓がある。分布的には、甕棺墓群と重複しながらも甕棺墓群よりも南側に拡がる傾向が窺われるが、調査区がトレンチ状であるが故にその詳細は明らかではない。また、検出した土壙墓が単純に2基で小群を構成するのか、あるいは数基を加えてより大きな一群で墓域を形成するのかは判断しがたい。

### 4号木棺墓 SR-04 (Fig.16 ph.11・12)

4号木棺墓は、I区の東側に拡がる甕棺墓群の中で最も南西端にあり、甕棺墓群から離れたように位置しており、北へ2mの距離には2号甕棺墓がある。南小口側は調査区外に拡がっているが、平面形は、小口幅が95cm、側壁長が150～170cmほどの長方形プランをなそう。壁面は垂直に立ち上がり、深さは35cmである。木棺墓は、はじめに長方形の墓壙を掘り、北小口壁下には幅が15cm、長さが60cm、深さが5～7cmの溝を掘り、その上に壁面から5cm内側に小口板を嵌め込み、壁面との間には明赤橙色粘土ブロックを含んだ暗茶褐色土を裏込めとして小口板を固定している。一方、側板は側壁面から20～28cm内側に板材を壁面に沿った横方向に据え、壁面との間には小口壁と同様の暗茶褐色土を充填している。棺床は平坦で、北小口板に沿って15～20cmの円形の範囲に赤色顔料が比較的まとまって拡がっており、北に頭位をとっていたものと推考される。主軸方位はN-21.5°-Wにとる。副葬品等の遺物は何ら出土しなかった。

### 7号土壙墓 SR-07 (Fig.17 ph.13)

7号土壙墓は、I区の東部に拡がる甕棺墓群の西縁にある東西軸の土壙墓で、上縁は2号甕棺墓と6号甕棺墓によって削平されている。そのため全容は明らかでないが、平面形は小口幅が60～70cm、側壁長が110～120cmほどの長方形プランになろうか。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は現況で25cmである。覆土は暗茶褐色土の單一層

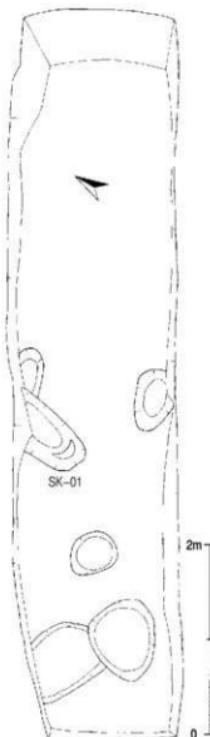


Fig.18 II区遺構配置図  
(1 / 50)

で、遺物は何も出土しなかった。

### 3). 土 墓 (SK)

土壙としては1基を検出したが、掘り込み面の一端を検出したのみで、それが確実に土壙であるかは即断しがたく、形状や拵がりについても明らかではない。

#### 8号土壙 SK-08

(Fig.7 ph.2)

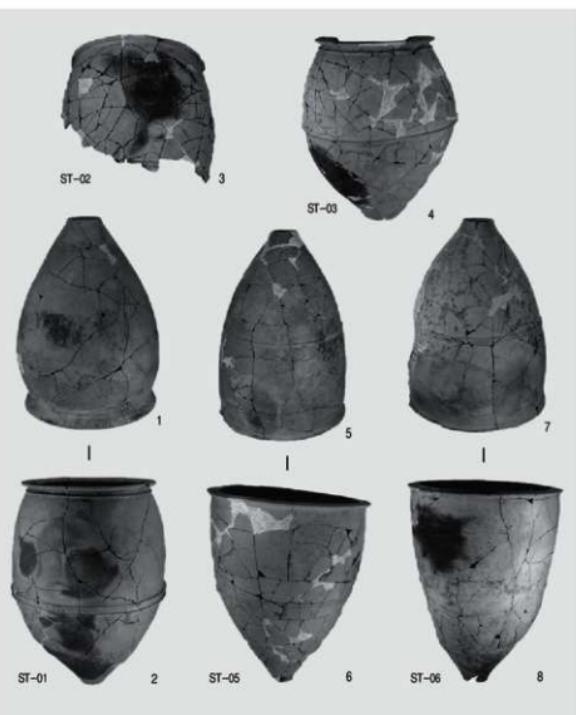
8号土壙は、調査区東南縁に位置し、すぐ北には1号甕棺墓がある。形状的には、弧状に拵がる竪穴の一部を検出したのみで全容は明らかでない。覆土的には1号甕棺墓と同じ黒茶褐色土の單一層で、大型甕片がわずかに出土した。状況的に甕棺墓の可能性が十分に考えられるが、甕棺本体を検出していなかったために土壙としたいに土壙とした。

### 3. II区の調査

試掘調査で遺構を検出したG・Hトレントチ区を一括してII区とした。しかしながら、表土層の除去に際しては杉木立や既存の防護フェンスの制約を受け、事前に設定した調査区とは若干異なり狭小な範囲に留まった。遺構は旧表土層下で小土壙1基とピットを検出したが、予測した古墳に伴う遺構は



ph.14 II区全景(西より)



ph.15 出土甕棺(縮尺不同)

検出されなかった。調査区の中央部には浅い溝状の凹みがあるが、これは忠魂社の建立によって削平された地山の改変と考えられる。

### 1). 土 壤 (SK)

土壌は、調査区のほぼ中央部で1基を検出した。調査区の西端で不整円形の凹みを検出したが、浅く無遺物であることから土壌とはしなかった。

#### 1号土壌(Fig.18 ph.14)

調査区中央部の北端に位置する土壌で、北側小口は調査区外に拡がっている。平面形は、短軸が50cmの隅丸長方形プランを呈し、長軸は110cmほどになろう。南小口側には半月形のフラット面が付き、いわゆる2段掘りの構造をなしている。断面形は壙央が浅く窪んだU字形をなし、壁面は急峻に立ち上がる。覆土は暗茶褐色土の單一層で遺物は出土しなかった。

## 4. おわりに

諸岡B遺跡第23次調査では、6基の甕棺墓と2基の土壙墓(木棺墓、土壙墓)を検出した。この成果をもとに、丘陵頂部に形成された甕棺墓群の墓域等について若干の問題点を整理して、今後の調査の参考としたい。諸岡丘陵に形成された甕棺墓群は大きく2群からなる。調査順に従って、丘陵の東裾に形成された一群をA群とし、丘陵の頂部に形成された一群をB群とする。このうち第23次調査区の甕棺墓群はB群の東縁に形成された小群で、この甕棺墓群は北へ拡がっていることが予測される。これに対して、東限は未確認であるが、1号甕棺墓の挿入状況や第4次調査区で検出した遺構の在り方から復原すると、丘陵は1号甕棺墓から東は急峻な傾斜面を形成していたものと考えられる。この急斜面は、尾根筋に沿って北へ延びていく。今、II区の北側にある段落ちは2号墳の造営に際して丘陵尾根を切断して形成された地山整形痕と捉えることができる。昭和49(1974)年に調査された3次調査区の甕棺墓は西縁の小群と云えよう。この3次調査区の甕棺墓群西の住宅建設に際しても甕棺が出土しており、その分布範囲は西へ拡がっていたことが考えられる。また、昭和28(1953)年の忠魂社の建立に際してゴホウラ製貝輪を装着した甕棺墓や細型銅劍を副葬した甕棺墓群が検出されており、3次調査区の甕棺墓群が広範囲に拡がっていたものと推考される。更に、瀧見天神社の南面にある4号墳の墳丘上でも甕棺片が採集されており、南限と位置づけることができる。

これらを勘案すると、B群とした甕棺墓群は諸岡丘陵頂部の東西長が40m、南北長が50mの範囲に形成された甕棺墓群で、細型銅劍やゴホウラ製貝輪を副葬する特定墓は、西縁に沿った斜面に埋葬されている。ただし、これら副葬遺物を有する甕棺墓がまとまって特定の墓域を形成したとは考えがない。一方で、丘陵の東裾に分布するA群と丘陵の頂部に形成されたB群を対比すると明らかにB群の優位性を窺うことができる。諸事情から詳細な時期や墓域の展開について論じることが出来なかつた。今後、B群の甕棺墓群と木棺墓や土壙墓群との墓域の形成過程やA群との有機的関連性および諸岡丘陵に墳墓域を形成した集落域との繋がりを検討し、加筆する必要がある。



ph.16 I区甕棺墓全景(東より CG合成)

## 報告書抄録

ふりがな	もろおかBいせき3
書名	諸岡B遺跡3
翻書名	諸岡B遺跡第23次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1060集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2009年3月31日
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地
諸岡B遺跡	市町村 福岡市博多区 諸岡4丁目地内
	コード 40130
	北緯 33°
	東経 130°
	調査期間 20071015
	調査面積 (m <sup>2</sup> )
	145
	調査原因 校舎建設
所取遺跡名	種別
諸岡B遺跡 第23次	主な時代
	主な遺物
墓地	発生時代
	主な遺物
	特記事項
	甕棺墓 本棺墓 土壙墓 土壙
	弥生大型甕 壺

## 諸岡B遺跡3

-諸岡B遺跡第23次調査報告-  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1060集

2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 (株)九州カスタム印刷